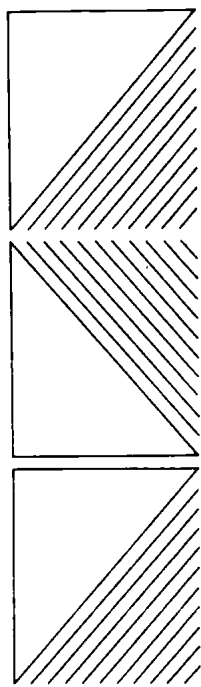
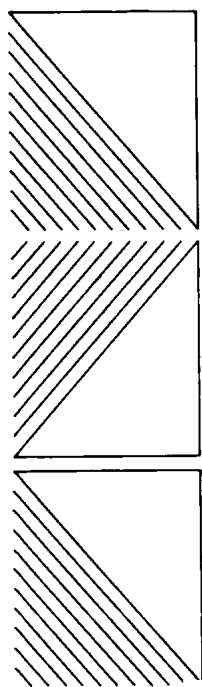


58

柏原兵三作品集 7



潮出版社

柏原兵三作品集 第七卷

昭和四十九年一月二十日 印刷
昭和四十九年一月二十五日 発行

著 者 柏 原 兵 三

装幀者 枡折久美子

発行者 島 津 矩 久

発行者 潮 出 版 社

東京都新宿区南元町一四一一

電話 五七一七二一 千一六

振替 東京 〆〇〇〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 鈴木製本所

第七卷
目
次

隨筆 心のなかの栖

I

自転車	9
疎開派の「長い道」	11
私の中の二十五年	18
習字の思い出など	20
父の回想	23
ひげ	30
死のかりそめの体験	35
私の二十代	42
酒の肴	43
白瓜	45
酒の師	46

おにぎりの話

屋根裏の部屋

心のふるさと

言葉の微妙さ

自動車

人間の歩く道

雪国の女

II

時についての

とりとめのない断想

現代儀式論

自然を拒否した人間の運命

学園における知性

贗学生

モルモットの嘆き

47	49	51	52	54	56	58	59	60	66	73	77	83
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

天高く病めるアメリカ
チェコの運命

101 92

III

子供と留学の話

103

ベルリンの野菜と果物

106

ベルリンの魚

110

ビールの話

114

ドイツの生活あれこれ

121

味の領域

125

汽車の旅

127

ハイデルベルクへの旅

129

即席会話法

131

ホテルの話

133

珈琲の話

138

IV

作品の背景

141

芥川賞まで

142

ドイツ文学と私

144

ヘッセと私

146

ヘッセとヒッピー族

151

「伊豆の踊子」のことなど

153

同人雑誌のない国で

154

カフカの父のことなど

157

断想

— オイレンプルク「日本遠征記」—

159

忘れられぬ本

161

幻の本への憧れ

162

生みの苦しみ

164

記録の保存

166

幸福な王子

168

現代にとって文学とは何か

175

随筆 続・心のなかの栖

I

富山と私―疎開時代の思い出―

181

思い出の食べもの

186

梅干しの話

189

山の温泉宿

190

戸隠中社のお祭り

191

図書館と私

192

火事

194

原稿用紙

196

万年筆

197

あの日あそこ

200

II

庭に植えられた「桐の木」

203

敬語への抵抗感

209

わたしの字引き―てふてふ・省線・家―

210

顔

211

言葉の断絶

212

死があるから生が尊い

213

時間

214

ドア

215

筆写

216

日曜日

217

変化のテンポ

218

III

家捜しの記

220

ベルリンの土筆

225

卵の話

228

水の話

230

キャビアとイクラ

232

ベルリンの入院生活

234

薬の失敗

237

Apotheke

239

ベルリンと私

242

船の中

249

IV

私小説の持つ可能性

252

異郷での死の恐怖

254

死語となった留学

256

翻訳についての雑感

258

わが愛する歌

261

—佐藤春夫の「殉情詩集」—

261

私の好きな画家—アンリ・ルソー—

262

ベルリンの書店

263

トーマス・マンの朗読など

265

「魔の山」の時間

266

ヤノーホの「カフカとの対話」

271

ブラハとカフカと私

273

蠟燭の光の下で

276

—トルストイの「幼年期」

276

「少年期」「青年期」—

評論 カフカの「アメリカ」

278

断片 自転車

289

解説 「もの」への視線……松本道介

291

年譜
書誌
編集後記

324 301 299

柏原兵三作品集 第七卷

随筆 心のなかの栖

I

自転車

祖母と母が、私の子供の五歳の誕生日祝に自転車を買ってくれた。一緒に住んでいるので、ふだんから子供にねだられていたらしい。二人は事故を何よりも恐れていて、買う前に、子供に、家の前の道以外には絶対に出不いことを約束させた。

家の前の道は私道で、車が入らない程の狭きでもないが、その道の奥にある家の自家用車以外には、ほとんど自動車が入って来ることはない。たまにクリーニング屋さんの小型の配達車が入って来ることもあるが、この私道が子供たちの絶好の遊び場であることを知っているので、慎重その

もののノロノロ運転をしてくれるから、まず心配がない。嘗ては自動車を楽に入れられないのが、この道の欠点とされていたが、今ではそれがかえて利点となっている。

最初子供は至極満足そうに家の前の小道を、自転車で往き来していたが、そのうちにだんだんと不満を洩らすようになった。大きな道へ出て、町中を乗りまわしたいというのである。

ある土曜日の晩、私は子供に、あしたの朝早く起きて自転車で乗って町中を乗りまわしてみないか、お父さんもついて行くから、といった。子供はすぐその提案に飛びついた。次の朝、私は子供に六時頃起きられる羽目に陥った。

私は子供の自転車を外へ出すのを手伝いながら、自分が初めて自転車に乗れるようになった時分のことを思い出した。今子供が使っている自転車は子供用の二輪車で、補助車がついているから、難なく乗れる。私が稽古に使った自転車は大人用の古自転車だった。戦争中だったから、子供の自転車などは買ってもらおうにも手に入らない時代だったのである。それは国民学校三年生の時分だった。私は未明に起きて自転車に乗る稽古にいそしんだのだ。

自動車の往来が今とは比較にならない位少なかった頃だけれども、それでも、大人の自転車で子供が乗る稽古を日中するのはかなり危険を伴ったのだ。しかし自動車も自転車も走らず、歩く人も誰一人としていない道路で、自転車に乗る稽古をする気分は格別だった。大分うまく乗れるよ

うになった頃、私は家の近くにある大きな坂へ行つて、その坂を自転車で降りてみた。一度その坂を自転車で降りてみたいと長い間心ひそかに願っていたのである。その坂を無事自転車で降り切った時の喜びを久しぶりに私は思い起した。

子供は自分の自転車に補助車がついてゐることをまだそれ程気にしていない。しかしいずれ、補助車を外して自転車を乗りまわしてみたいと思うようになるだろう。その時になったら、私はこの自分の経験談を話して聞かせようと思つた。

朝の町は予想通り静かだったし、車の通りもまったくなかった。空気が東京の真中にしては意外にうまい。私は早くこういう散策を思いつかなかつたことを後悔した。子供は喜ぶし、自分にとつても健康にいい筈である。私は肥り過ぎて体重を大幅に減らさなければならぬ状態にあるから、できることなら毎朝でもこうして子供と共に散歩をしたらいいのかも知れなかつた。

子供は楽しそうに自転車のペダルを踏んでゐる。自転車の走る速度と、私の歩く速度とはちょうど同じ位である。

「朝の散歩は気持ちいいな」と私は思わず口に出していつてみた。

「僕も気持ちいいな」と子供はいった。

とある曲り角で、私は犬を連れて、ステッキをついて散歩している老人に逢つた。この老人と犬には見覚えがあつ

た。夕方よく犬を連れて散歩をしているのに出逢うことがあつたからである。この人は朝もこんなに早い時刻に散歩をする習慣があるらしいな、と私は何か発見でもしたように思つた。

老人と犬をやり過してしばらくしてから、私の歩く速度と丁度同じ速度で自転車を走らせてゐる子供を見ながら、私は朝早く犬を連れて散歩する気分というのはこういう気分なのかも知れないな、ということ考えた。

ふと私は子供をからかつてみたい欲求に駆られた。

「光太郎」と私は子供の名前を呼んでいつてみた。

「いい気持ちだろう」

「うん、とっても」と子供は、明るい、さわやかな声で答えた。

「お父さんも、とってもいい気持ちだよ」

「そう」と子供はいった。

「まるでな、仔犬を連れて、散歩をしているような気分だよ」

「ふうん」と子供は答えたが、自分を仔犬になぞらえられて、明らかに自尊心を傷つけられた風だった。

子供はしばらく黙っていたが、やがてこういつた。

「よくラッシーみたいな犬を引張つて自転車で運動させている人がいるでしょう」

「そうだな」

私は子供の反撃を予想できずに答えた。

家の近所にコリー種の犬を飼っている家があった。その家の人がよく、その犬を運動させるために、自転車に紐でつないで連れ出し、町なかを乗りまわすことがあったのである。そのことを知っているのだな、ということは了解できた。

「こうやって、お父さんを連れて、自転車に乗っているとね、ラッシーに運動をさせるために、自転車を走らせているみたいだよ」

「参ったな」と私はいった。

「しかし」と私はいった。「あの自転車はこんなにゆっくり走っていないよ」

「僕だって、もっと速く走れるよ」と子供はいつて、急にペダルを速く踏み出した。

自転車は速度を増した。私は大股に歩いたが、そのうちにそれでは追いつかなくなって、とうとう走り出した。子供は一向に自転車の速度をゆるめない。とうとう私は息切れがして来た。

「光太郎、ストップ」と私はいった。

子供は急ブレーキをかけた。私はようやく子供の自転車の追いつくことができた。子供はまたゆっくりとペダルを踏み出した。

「ね、速く走ることができるでしょう」と子供は得意そうに、私の方を見ながらいった。

「そうだな」

「時々今みたいに走らせてみるね」と子供はいった。
「時々にくれよ」と私はいった。

自動車が二台猛烈な勢いで角から飛び出して来た。私は朝の道もこの現代の怪物の危険から無条件にまぬがれてはいないことを思い知らされた気がした。

(43年6月)

疎開派の「長い道」

昭和十五年の四月に私は渋谷区のある尋常小学校に入學した。しかし国民学校令が公布されて、尋常小学校が国民学校に切り換えられ、教育の戦時体制化が行われたのは、次の年の三月だから、小学校一年の末には、学校の名称は尋常小学校から国民学校に変わっていたわけである。終戦を迎えたのは国民学校六年の時だったから、卒業した時(疎開から帰ると、私は元の学校に復学した)には再び学校の名称は変わっていて、国民学校は小学校となっていた。

こんな風に学校の名称が頻々と変わるのは私の世代の運命のようなものだった。旧制中学校に入ってから、教育制度の改革で旧制中学校は新制高校に昇格したから、その新制高校に進学して卒業するまでに、私は同じ学校に六年いたわけだが、その間にその名前も都立××中学校、都立新制××高等学校併設新制中学校、都立新制××高等学校、都立××高等学校といった具合に四回も変わっている始末で

ある。

だからこのあたりの自分の履歴書をもし編年体で書かなければならないとしたら、学校の名称が次から次へと変るのですね、面倒なものとなってしまいうだろう。この世に恒常的なものは何もなく、すべてがうつろい易く、うたかたのようなものだという自覚が私の心の底にあるのは、もしかするとこのような事実とも無関係ではあるまい。

私がもの心ついた時、もう日本は中国との戦争を始めていた。謂わば戦争は常態だった。当時のことを思い出すさすがにしようと思つて当時のアルバムを取り出して見ると（私の家は焼けてしまったが、弟と二人で父の故郷の富山県に疎開した時に身の周りの品物を持って行ったお蔭で、アルバム類は残っている）、幼稚園で陸軍病院に傷痍軍人を慰問に行った写真が出て来た。それから三越劇場に傷痍軍人を招待して、幼稚園の児童が慰問の演芸を見せている写真などが出て来た。幼稚園の頃の写真はかなりあるが、そのあと戦争中の国民学校時代の写真はクラスで撮った写真が一枚と、弟と二人で疎開する時に家族で写真館へ出かけて撮った写真が一枚と、田舎の国民学校のクラスの級長と町へ出かけて記念に撮った写真の三枚しかない。

今のようにカメラが普及していなかった時代だからスナップ写真がないのは不思議でないとしても、毎年一回クラス全員で撮るのがならわしであった小学校（当時は国民学校といったわけであるが）の写真が一枚しかないのは、だ

んだん戦争が激しくなつて、フィルム類が手に入らなくなり、学年が変るたびに担任の先生とクラス全員で写真を撮るしきたりが中止になったことを物語っている。そんなわけで当時の写真といったらこんなものしかないのだが、しかしこれとても疎開して戦災に免れたからこそあるので、あの時期の写真をもったく持っていないという人々はいぶん多いに違いない。この間も小学校時代のクラス会があつて、六、七人集まったが、そのうち小学校時代の写真を一枚も持っていない者が三人もいた。

ところで弟と二人で疎開する時に家族で撮った写真を見ると、今でも私はある種の感慨を感じ得ない。それは、こうして家族で写真を撮るのはもしかするとこれが最後かも知れないという気持をめいめいが心の中に抱いて撮られた写真だったからである。いつ戦争が終るか分らなかったし、敵の飛行機が将来本土を頻繁に襲うようになることは予定されたプログラムのようなものだったから、当時再びみんなが全員無事で再会できるという保証のようなものはない。にもなかつた。

まだ学童に過ぎなかった私たちの周囲にも死はすでに親しみ深い存在だった。家族の誰かが空襲でいつ死ぬかわからないという可能性は日常性の中に含まれていたし、私たちも遠くから少年飛行兵か、特攻隊を志願して光榮ある、名誉ある死に欣然として赴く筈だった。人間には生きようという意志のはかに死への憧れ、死に対する情熱のようなもの

のがあると思うが、少年の私の心の一部を大きく占めていたのも、この死への憧れであった。

数年前に私はオーストリア・ハンガリー帝国の没落を華麗な筆致で描いたオーストリア文学の傑作と称されるヨーゼフ・コートの「ラデツキー行進曲」(筑摩書房刊)を訳したが、その中で作中の主人公の一人カール・ヨーゼフが未来の死を夢みる次のような場面がある。

「彼は王室を構成している人々すべての名前を知っていた。彼はその人々をみんな本当に愛していた。子供らしく熱中した心で。とりわけ皇帝を、慈悲深く、偉大で、気高く、公正で、限りなく遠い存在でありながら非常に親しい、そして軍隊の将校たちには特に好意を持たれている皇帝陛下を愛していた。軍楽を聞きながら皇帝陛下のために死ぬことこそ最高の死であった。ラデツキー行進曲を聞きながら死ぬのだったら死ぬことはどんなにたやすかっただろう。すばやい弾丸が音楽の拍子に合わせてカール・ヨーゼフの頭のまわりをびゅんびゅんと掠めた。彼のサーベルの白刃がきらめく、そしてラデツキー行進曲のやさしい速度に心も頭も満たされて、彼は行進曲の大鼓の音がかもし出す陶醉の中へ沈み込んだ。すると彼の血が深紅の細い一条となって、トランベットの光り輝く黄金の上に、ティンパニの漆黒の上に、シンバルの勝利に輝く銀の上にしたたり落ちた」

この部分を訳出しながら、私は少年時代の自分がこの状

況に共鳴するような時間を多く持っていたことを今さらのように思い出した。私は陸軍幼年学校に進学するか、少年飛行兵になるつもりでいた。戦争が早く終るとすれば、幼年学校、士官学校と進んで軍人になるのでは遅過ぎるから、少年飛行兵になった方がいいかも知れない、などと真剣に考慮したこともあった。

そして少年飛行兵になったら、祖国の運命に殉じて死地へ赴くつもりであった。死は崇高なもの、永遠の榮譽につながるもの、ロマンティックなものとして、未来に輝いていた。

ある日突如として(実際にはもう少し幅のある時間だったのかも知れないが)ある種の品物が店頭から消えてしまふ、ということとは当時の日本では日常の出来事だった。

今でも私はバン屋の前を通ると、子供の頃バン屋の前のからのガラス・ケースを横目で見ながら、ついこの間まであそこのガラス・ケースにはさまざまな種類のバンがあったのに、どうしてこんな風に突如として消えてしまったのだらうか、もっとたくさんあった頃どうしてたくさん食べておかなかつたのだらうと思った当時の無念の想いが記憶の中に蘇って来ることがある。そんな風に物が店頭から消えてなくなってしまうのは、子供の目には物が神隠しにあったみたいな印象を与えた。その頃でもそれが統制令という法令の所産であるということはある程度分っていたと思うが、しかし実感としては非合理的な神隠しに遭ったのだと

いう感覚の方が強かった。

いづどんな風に世の中が変るかわからない、持統的なものは何一つないのだという感覚は、私の心の奥底には意外に深く根を張っているようである。だから今でも、昭和元禄を謳歌しているように見える（これとても今この時点で多くの影の部分を含んでいるわけだが）街の中を歩いていても、これはかりそめのものだ、贋の姿だ、いつ何時姿を変えてしまふかわからないのだという思いが、心底には絶えずある。

昭和十九年の春に父の故郷の北陸の海辺の村に疎開して、昭和二十年の秋に引揚げて来た私は空襲を直接に体験したことはない。だから疎開から帰って来た私の前には、空襲を受ける前の東京が空襲を受けていかにその姿を変えたかという結果だけが示されただけである。空襲以前の東京の姿しか知らない者の頭に中間の過程抜きに、空襲で徹底的に破壊された東京が突如として示されたという体験は、ある意味で非常に鮮烈だった。その時私は世田谷の郊外にあって焼け残った祖父の家にいた両親のところへ帰ったのだから、真先に訪ねたのは昔住んでいた町だった。

私の住んでいたあたりは、まったくの焼け野原となっていた。小学校へ行くと、それでもブルの跡に脱衣所だけが焼けずに残っていて、そこが職員室になっていた。私はこの哀れな職員室しかない学校に復学の手続きをとって、満員電車に乗って往復二時間の登校時間をかけて通学した。

最初は文字通りの青空校舎だった。雨が降ると自然休校になった。天気の日には校庭の片隅に車座になって、先生を囲み授業する日が続いた。やがて青山の近衛連隊の兵舎の一部を借りることができて、そこへ移ったが、ここでは南京虫と雨洩りに苦しめられた。人数は極端に少なく、嘗ては一学年四組二百人いた生徒が、卒業の時は十七、八しかいなかった。卒業の日には雨が降ったので、校内で卒業式が行われたが、校長先生の頭の上にボタボタと雨水が洩って来る有様だった。学校の帰りにはよく焼跡をさまよい歩き、闇市を彷徨した。

焼け残った石堀や、大きなドブの縁に、数年前の思い出が結びついているのを発見する瞬間が哀れにも楽しかった。すべてが変ってしまったのだ、この世の中にはその永遠の持続を信頼できるものは何もないのだという私の根元的な感覚は、この時期にもっとも強く作られたのかも知れない。この時期の記憶は私の心に余程忘れがたく灼き付いていると見えて、その頃の通学径路にあった街の姿が変貌し、モダンな装いを凝らして繁栄を楽しんでいる姿をこの頃目の前にしても、その背景に二十五年前の当時の姿が二重映しに泛んで来るのをどうすることもできない。繁栄の街の姿の背後に、屠気楼のように敗戦直後の姿が浮んで来てしまふのである。

去年の夏私はアメリカに船で旅行する機会があり、途中二日ばかりハワイに滞在したが、ハワイの町を散歩してい